

ふらっと旧東海道

天竜川を渡り「見附宿」へ12km歩く

4月30日、先回の続きで天竜川駅をスタートして東へ向けて歩いた。今回のメインはなんと言っても天竜川を歩いて渡ること、次に熊野(ゆや)の長藤の見学と、見附宿では旧見附小学校の見学だ。

田植えが始まり、麦が生長している

今回も7.07"の区間快速に乗り大府から豊橋行きの新快速に乗った、29日からお休みの会社も多いので刈谷で降りる人は少なかった。でもその代り安城や岡崎まで行く人が多く、私だけ席に座ることは出来なかった。安城では座れるかと思ったがだめで、岡崎でやっと4人そろって座ることができた。六日前に比べて田園の景色が変わっていた、麦畑は緑の色が濃くなって成長していることが分かるし、田んぼにはすでに田植えが終っていたのだ。まだ小さな苗が水の中にゆれている、それに三河の山並みは一段と緑が鮮やかになってきたのが感じられる。同じ場所を走っていても回りの景色は季節ごとに移り変わっていく、恵まれた自然に囲まれて生活できることは嬉しい限りである。豊橋で乗り換えしばらくして左手に大きな岩山が見えてくると県境で、静岡県に入る。

二度続けて天竜川駅をスタートする

先回同様9.10"スタートする、東海道に出て右折して進むと旧薬師村で10"も歩いたら「凧工房」があった。浜松の凧揚げは知られているが、凧を作っている店は珍しい。「みやび」という店で、ショーウインドには色とりどりの小さな凧が飾られていた。隣には大きなシャッターの山車蔵を思わせる建物があったが、きっとでかいサイズの凧を作るのだろう。その先には立派な松並木が残っていた、そのうえ松の木の根元には色とりどりの草花が咲き美しかった。きっと近くの人たちが手入れをしているのだろう、花のある景色は人の心を間違いなく和ませてくれ嬉しい限りだ。すると目の前に国道一号浜松バイパスが高架で走っており、コンクリートの構造物が行く手をさえぎるように横たわっていた。高架をくぐり安間川を渡ると東海道の標柱がある、でもこの辺りにあるはずの安間一里塚跡が見つからない。よく見ると2.3m離れた金網の傍に杭が一本建っていて、それに「安間一里塚跡」と書かれていた。ちょっと寂しいがないよりはましと思わなくてはいけない、そこから3分ほど進むと金原明善記念館と生家がある。



凧工房「みやび」



金原明善記念館

天竜川の治水に献身した金原明善

金原明善は明治元年、37歳で天竜川の度重なる災害を絶ち民心の安定と産業復興に

立ち上がった。明治10年には内務卿大久保利通に会見し、天竜川治水のため全財産寄付を申し出て補助金の承認を得、翌11年に私財5万6千円余を寄付した。この金額がいかほどのものかピンとこないが、歴史に詳しい友もこの当時はかなりのインフレがあり分かりずらく今だと10万～100万倍か、明治19年の武豊線建設工事の人足は一日4銭だったという。と、すると今のいくりに相当するのか……………。これに対して明治天皇が行幸、その記念碑が天竜川堤防の六所神社横にある。その後明善は北海道に農場を創設したり、岐阜県では濃尾大地震後の植林計画を立案するなど社会の公共事業に大きな貢献をした人物である。

私はまるで覚えがないが、友が言うにはわれわれが5年生の時の教科書に載っていたという。彼は教師になってその教科書を確認しているそうだから間違いないだろう。でも、記念館にその教科書は見当たらなかったの、友は係りの人に内容を話したがその人も知らず、その教科書をぜひ展示して欲しいと頼んだ。

記念館の向かいには生家が残されているが、明善の生家は名主の家柄で建物は慶應2年に修復された。中へ入ってみたが大きな家はどっしりとした落ち着きを感じる。わが家みたいな中二階の造りだがとてもでかい、土間も広く屋根には明り取りもあり、裏手には蔵もあった。

天竜川を歩いて11分20秒で渡る

記念館を出ると六所神社に突き当たり右に回って天竜川の堤防に出る。かなり広い河川敷公園の向こうに水が流れ、右手にはJRの鉄橋が左手に国道一号の橋が見える広々とした景色がすばらしい。時間は10.10"で六所神社の裏手を回ると明治天皇の玉座碑、舟橋跡、天竜川木橋跡の標柱があった。

ここから新天竜川橋へ向かう、2006年12月に歩道の併設された新天竜川橋が完成している。それまでは東海道を歩く場合、橋が狭いのと交通量が多く危険なためにバスで天竜川を渡らないといけなかった。

手前の天竜川橋前の信号で道路を渡ると、新天竜川橋との間は上りの斜面になっていて小さな公園が出来ていた。寄ってみるとそこには天竜川に架かった橋の推移が分かる説明板があった、それによると江戸時代は渡船でその後明治7年小舟を並べて連結した舟橋が設けられ、きちっとした木の橋(幅3.6m、全長1163m)が出来たのは明治9年とある。しかも、この橋は昭和8年今の橋が出来るまで使われた。

新天竜川橋は国道一号の下り専用で片側4車線、それに幅4m程の歩道がついた橋に生まれ変わり従来の新天竜川橋は上り専用線になっていた。

天竜川の流れは川幅の半分もないほどだったが、これがひとたび荒れ狂うと手が付けられなく、氾濫を繰り返して多くの人々が難儀をしていたのだ。今も流れは真っ直ぐではなくて、S字型のところがあった。

渡り始めて気がつき時間を計ったところ、橋を渡るのに11分20秒を要した。



新天竜川橋(左は旧天竜川橋)



天竜川最初の橋

家康は天竜川渡船に特権を認めた

橋を渡り渡船場跡へは1km程上流へ向かう、この間は堤防を歩くと景色もよく風も感

じられるが交通量が多く危険なので、堤防と東海道の間にある小道を歩いた。所々に「熊野(ゆや)の長フジ」の案内看板が出ていた、途中で話をしている叔母ちゃんに道はこちらでよいか尋ねると「もうちょっと早くおい出るとよかったね」という。フジの花は盛りが過ぎているというのだ、そうかやはり今年は花が咲くのも早いようである。やむを得ない、しばらくすると道を左右に移動する人が見えてきた。たどり着くとその左が堤防で渡船場跡の碑が建っており、その向こう側の河川敷が熊野の長フジを見に来た人の臨時駐車場になっていた。

渡船場跡の碑の前で記念撮影をして堤防に上がってみると、広々とした景色が広がってすばらしい眺めだった。この地は旧池田村で天竜川が三方原と磐田原の間を乱流し、平野を形成し1170年頃南北10km、東西5kmという広大な荘園である池田荘ができていた。東海道が交通路として重要になってくると、浜松城主だった家康は池田の渡船を重要視し、天正元年(1573)舟方の年貢や諸役を一切免除した。さらに渡しの船頭を殴れば死罪とするという制札をだすなど特権を認め保護した。

では何故これほどまでに池田の渡しを保護したのか？ それはこの時代の背景がそうさせたことに他ならない。まだ江戸幕府が出来る前であり世の中は安定しておらず、特に家康にしてみれば武田信玄の脅威に脅かされていた。そのためあれもこれも手が回らず、よく言えば任せただが今流に言えば「丸投げ」したわけだ。

渡船場は三箇所あり、川の水量に応じて使い分けられていた。下の渡船場は平常水位の時使用し、中の渡船場は中程度の水位の時、高水位の時に上の渡船場を使用した。本陣2軒、宿屋も数軒あって間(あい)の宿として栄え、池田の渡船は明治になって天竜川に橋がかかるまで続いた。



天竜川渡船場跡碑の前にて



熊野の長フジ

熊野(ゆや)御前と長フジ

渡船場跡から少し上流に池田橋跡の碑と、家康の出した天竜池田渡船許可証の説明板がある。ここにも臨時の駐車場が河川敷にあり、大勢の人が行きかっていた。その流れについて行くと行興寺で、ここは謡曲「熊野」で知られる池田宿の長者の娘「熊野御前」が建てた寺といわれている。熊野とその母の墓は町の文化財になっている。

寺の境内には熊野が植えたといわれる見事な藤棚がある、花房は1.5mにも及び熊野の命日という5月3日前後は大勢の人でにぎわう。樹齢850年と推定されるフジは国の天然記念物に指定されている。花は盛りを過ぎてちょっと残念だったが、お参りのあと腰を下ろしてソフトクリームを食べながら、花の香りを楽しんだ。

本堂横に熊野御前の墓があり、裏手にもフジ棚が広がっておりかなり広かった。そのうえ能舞台まであり、大正琴の演奏が行われていた。ゆっくり演奏を聴くことが出来なかったのが残念だった。

街道名物だった「長森かうやく」

行興寺をあとにして天竜川の下流に向かって歩き、国道一号の磐田バイパスと国道一号を横切って進むと東海道は左に曲がる。その角には山田さんの家があるが、どうやらこの家が江戸時代前期に作られた「長森かうやく」の山田与左衛門家のような。も

っとも今は現代風の家になっている。長森かうやくはあかぎれや切り傷に抜群の効能があり、近隣の村人はもちろん参勤交代の大名たちや、東海道を上下する旅人の土産物として大変な人気があったという。山田家には今も桜の木の一枚板の看板が残されており、中央の上には16弁の菊の紋章がついている。製法は極秘中の極秘でたとえ妻であっても明かされることはなかったというが、現在は作られていないそうだ。したがって今となつては、家の前に立てられた説明板を見なければ知ることもない代物になってしまった。またこの付近には長森立場(旅人や馬の休憩場)があった。

ランチはラーメン、でも選んだ店が.....

若宮八幡宮の前を通りJA豊田支店の手前までくるとラーメン屋があった、角煮厚切りラーメン「一番屋」としてある。浜松まで来たので一度うなぎなんぞ食べたいと思っていたが、時間も丁度12.00"だったのでラーメンに決めた。

メニューを見るとラーメンは700円、五目ラーメン850円となかなかいい値段になっている。ただラーメン+100円とか200円でサラダとかチャーハンなどいろいろな物が食べられるシステムになっていた。

つまり、ラーメンだけでは足りないという人にはそれなりの値段で食べられることになる。が、そんなに食べられるわけでもないのでネギラーメンの醤油味にした。3人はネギラーメンで友だけは坦々麺にしていた。出されたラーメンはちりちりの細麺でなかなかいい味だった。それにラーメンを頼むと小さなアイスクリームのサービスがついていたのもよかった。

それなりに満足して店を出たのだが、しばらく行くとラーメン屋があり、その看板にはラーメン400円・水曜木曜日ビール半額とあるではないか。今日は木曜日なのだしまった!! さらに進んだ所にもラーメン400円の看板があるではないか。先が分からないと言うことは不便なことだ。

花に囲まれた「宮ノ一色一里塚」

ラーメン屋を何軒か見ながら進むと旧宮ノ一色村に入り、道端に秋葉山常夜灯があった。竜の彫り物があり竜燈とも呼ばれ、風除けに周りを板で囲み上の部分だけ灯りがもれるように、格子になった貴重なもので地元の自治会で管理しているとあった。そこから4分も歩いた所に宮ノ一色一里塚はあった、つつじの花が植えられた塚はこれまでに見た一里塚とは趣を異にしていた。あまり見ない横書きの石碑がある塚の上へはコンクリートの石段が付けられているのだ。そこは経済連のバス停の前でもあった。

一里塚から万能橋、一言橋を渡ると大きな工場が現われた、高砂香料という化学工場だ。でも何を生産しているかは知らない、工場の横をさらに進んで行くと屋上に恐竜が立っているゲームセンターがあった。これってどういう意味があるのだろうか、まさか親がゲームしている時子供は恐竜と遊ぶわけでもあるまいに。



宮ノ一色一里塚跡



国分寺跡(正面のビルは磐田市役所)

遠江国分寺跡で休憩する

旧中泉村に入ると立派な中泉公民館がある、欧風な感じのするオレンジ色の丸瓦が使われた屋根はとてもシックですばらしい。そんな近代的な建物の反対側には大正時代と思しき古い門柱が立ち、 医院の文字が読めた。でもその敷地は大通り沿いなのに草がいっぱいだった。そんな通りは緩やかに、そしてかなりの下り坂になって続いていた。今までこんなに上った記憶はないほどの下り坂で、途中には立派な和菓子屋さんがありまた宝石店もあった。そんな通りの先にパークホテルという高いビルが見えてきた。その一筋先が駅前通で、そこを左折して進むと「蚊帳の博物館」の垂れ幕のある店があった。確かに店先には蚊帳が並んでいた、500mも行くと遠江国分寺跡に到着した。東西180m、南北253mという広い敷地は公園みたいな広場になっていて、学生たちが写生をしていた。

国分寺とは 奈良時代(741年)に、聖武天皇の命令により日本国内66の国に建てられた仏教文化を代表する寺院で、僧寺と尼寺(国分尼寺)と一緒に建てられた。遠江国分寺と国分尼寺は古代「大之浦」を望む景勝地に、両寺の金堂、講堂の建物中心線を同一にして、国分寺の北200mに国分尼寺を配して建てられた。

遠江国分寺は七重の塔、講堂、中門、回廊などを築地塀などによって囲み東西180m、南北253mに達した。現在も塔や金堂跡には礎石が残っていて、国指定特別史跡に指定されている。愛知県の国分寺は三河は国府付近に、尾張は定かではなく国府宮あたりではないかと言われている。

国分寺跡の草原に腰を下ろし、お茶を飲みながら古に思いをはせるひと時は吹く風もさわやかだった。



国分寺跡の碑



見附小学校

見附小学校は外からの見学

13.47"国分寺跡を出て見附小学校へ向かう、途中に西光寺という大きな寺があった、また見附小学校と同じような形の小さな建物が現われた。何かと思ったらトイレだった、よく目立つし観光都市らしくてよい。直に見附宿木戸跡を通り、姫街道分岐点を過ぎると東海道は右に曲がる。メインストリートを少し歩くと見附小学校に到着した、淡海国王神社の鳥居の横に5階建ての白い建物がそびえている。見学しようとしたら、祭日の翌日は休館日となっており中へは入れなかった。やむを得ず窓から中をのぞくことしかできなかった。

旧見附小学校は学制発布間もない明治8年(1875)に落成した、現存する日本最古の洋風木造小学校校舎です。当初は4階建てでしたが明治16年に増築されて今の5階建てになった。記録によると明治14年の生徒数は男子300名、女子182名の合計482名で、就学率は66%でした。大正11年まで小学校として、その後は洋裁学校、病院として使われ現在は資料館になっている。白い洋風の建物は今でも存在感のある、すばらしいデザインで立派な建物だと思った。

このあと東の見附宿木戸跡まで歩き、国道一号に出て14.49"のバスで磐田駅に戻った。歩数は23,700歩で、15.21"の電車に乗り帰路に着いた。